

「活人刀」作者不明

明治二十八年四月十二日、佐藤進が診療後、東京某新聞に載ったと李に示した七言律詩で、李は、これを朗吟し佳作であると評した。この漢詩があつたればこそその活人剣碑である。

原文

豈要軍中講六韜
青囊一個建勲勞
才如方朔奇言湧
術似華陀令譽高
世上皆推医國手
腰間常佩活人刀
蓬萊自有長生藥
不向瑤池偷碧桃

書下し文

豈あに軍中ぐんちゆうに六韜りくたうを講ずるを要せんや
青囊せいのおう一個いっこ、勲勞くんろうを建つ
才ほうさくは方朔ほうさくの如く、奇言湧きげんわき
術かだは華陀かだに似て、令譽れいよ高し
世上よしかん、皆推す、医の國手こくしゆ
腰間ようかん、常に佩はく、活人刀かつにんとう
蓬萊ほうらいに自おのずと有あり、長生ちやうせいの藥やく
瑤池ようちに向むかかはざれ、碧桃へきとうを偷ぬすまんと

現代口語訳

どうして軍中で兵法書『六韜』を講ずる必要があるうか。
医学書『青囊』一つあれば、勲功を立てることができる。
知の才能は、東方朔のように自在に奇抜な言葉が湧く。
医の優れた技量は、華佗に似てすこぶる名声が高い。
世間では皆が推している、医の国手だと。
腰には常に帯剣している、活人刀を。
蓬萊の地ここの日本には、不老不死の妙薬が自生している。
だから瑤池には出向かないでください、碧桃を偷もうと。